

韓国における中国朝鮮族の児童生徒の流入と教育に関する研究

—「留守児童生徒」から「流動児童生徒」、そして受け入れ社会の「外国人児童生徒」へ—

宇都宮大学 金 英花

1 目的

本報告の目的は、過去 20 年間外国人の受け入れにおいて、日本と非常に類似した経験を有してきた隣国韓国において、外国人児童生徒が急激に増えた背景と課題を中国朝鮮族の児童生徒を対象に明らかにすることを目的とする。かつて、親の出稼ぎによって韓国への入国が閉ざされ、送り出し地域の大量の「留守児童生徒」として社会問題となった朝鮮族の子どもたちはいつの間にか韓国社会の「外国人児童生徒」問題として、今度は受け入れ社会に新たな課題と対応を求めている。そもそも朝鮮族の子どもたちはなぜ移動するようになったのか。移動による朝鮮族の児童生徒は韓国社会でどのような状況に置かれているだろうか、韓国社会、そして行政、教育はどのように対応しているのか。本報告は、これらの一連の問題意識を解明することを研究課題とする。

2 方法

そこで、データとして分析に用いる主なデータは、韓国で中国朝鮮族の密集地域である九老区加里峰洞、永登浦区大林洞、中国の延辺で行った調査の結果である。具体的には、2016 年から 2017 年にかけて現地で実施した、永登浦区大林洞に位置する公立小学校での教員へのインタビュー調査と中国人が多数在籍する私塾、加里峰洞の朝鮮族関連新聞社、ソウル市教育庁と在外同胞財団での関係者へのインタビュー、中国延辺の教育局の担当者と韓国渡航経験をもつ児童生徒、および家族計 10 人を対象にしたインタビュー調査の結果を用いる。かれらの語りから、朝鮮族の児童生徒が送り出し地域の「留守児童生徒」から、韓国への流入背景やその移動過程、韓国で「外国人児童生徒」として生きる悩みと課題、トランスナショナルな生活を続ける動機や移動形式、行政、地域社会、学校現場の対応を中心に分析を行う。

3 結果

分析の結果、朝鮮族への受け入れ政策の制限によって留守児童生徒が発生したのと同じく、受け入れ政策の変遷によって流動児童生徒が発生し、それは更に受け入れ社会の「外国人児童生徒」の問題として、地域社会と学校現場に新たな課題を生み出していることが見えてきた。また、朝鮮族の親の不安定な滞在は、その子どもたちのトランスナショナルな生活へとつながり、越境の空間を往復している要因となっていた。

4 結論

以上から、「越境」と「留守」を生きる朝鮮族の児童生徒の移動の方向は韓国に完全に向いているだけではなく、中国への帰国や往来という形で維持されていて、彼らは移動を介して国境を越えた教育空間を送出・受入社会双方に広げているということが見出される。

文献

Castles, Stephen and Mark J. Miller (2009), *The Age of Migration: International Population Movement in the Modern World 4th Edition*, NY: Guilford Press. = (2011) 関根政美・関根薫監訳『国際移民の時代 第4版』名古屋大学出版会。

Portes and Rumbaut (2001), *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. =(2014)村井ほか訳. 『現代アメリカ移民第二世代の研究：移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店